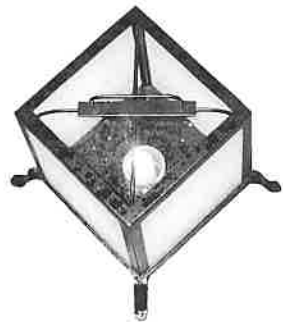


法隆寺金堂修正会に随喜して

明治大学助教授
駒沢女子大学講師
東方学院講師

阿部 慈 園

(横浜善光寺育英会参与)



①

おしひらく おもてとびらの あひだより
はやみやたまふ みほとけのかほ
たちいでて とどろととぎす こんだうの
とびらのおとに くるるけふかな

秋艸道人・会津八一は『南京新唱』にて、法隆寺の金堂を訪ったおりの感懐をこの二首に託している。金堂の扉ははなはだ高く、広く、厚

いので、はなはだ重い。それゆえ、この扉を開き閉す音に悠古の響がある、と八一は註している（『自註鹿鳴集』新潮文庫、六二ページ）。

急に『仏教四季曆』（仮題）の刊行のはなしがつまみ、本年一月七日お正月のあいさつかたがた、絵を描いて下さる石川響先生（日展評議員・東方学院講師）を訪ねたところ、

「ならば、法隆寺の金堂修正会に会って、吉祥悔過じょうごけの法要をまのあたりにしたらよいでしょう。わたしは数年前に行つて、絵をかい

たものがありますから」

といわれる。その場で法隆寺前執事長の種村大超老師に電話をされ、すぐに参拝の許可をいただいた。

②

「平成九年一月十四日午後四時三十分集合云々」の正式な来山許可状（十四日は結願けちがんで八日から始まる修正会中の一番良き日である）を持参して、当日二時すぎに宿舍の法隆寺グランドホテルに到着。三時に種村老師の御自坊である福園院を訪ねて、無理な依頼の快諾にお礼を述べて辞去する。福園院さまのお庭はよく手入れがされていて美しかった。事務所に向かう道すがらテレビ等で見たことのあるなつかしい顔が小生に近づいてきて、荷物を一つ持つという。「立松さんですね」というと「頭を坊主にしよんされましてね」と答える。一九九五年から「承仕」

という修正会の練行衆れんぎょうしゆうのアシスタントを勤めているという。わたしを今夜の練行衆の一人とまちがえてくださったらしい。事務所までいろいろ話しながら歩を進める。立松和平さんはわたしと同じ昭和二二年生まれである。

事務所で高田良信管長・大野玄妙執事長に拝問。小一時間あったので、夢殿および大宝蔵殿を拝する。この秋、ドラクロアの絵といきちがいにフランスに赴かれる百済観音の前で『延命十句観音経』を誦す。八一はこの百済観音に、

くわんおんの せにそふあしの ひともの
の

あさきみどりに はるたつらしも
ほほゑみて うつつごころに ありたたす
くだらぼとけに しくものぞなき

の二首を献じた（同、二三ページ）。

③

午後四時三〇分すぎ、事務所に戻って受付を
 します。ここで『法隆寺要集』（高田良信監修、
 平成八年五月法隆寺発行、八千円）を購入。修
 正会等の法要の次第がすべて収録されている。
 巻末の「般若心経ちぢ児読み」と「唯識三十頌ちぢ稚



藤谷良覚師が過悔吉祥会修正

「児読み」はほほゆるませるものがある。

藤谷良覚師の今夜の吉祥過悔の法要の懇切な
 説明を拝聴したのち、夕食をいただいた。師は
 法隆寺に出家し、阪大の印哲を卒業ののち、龍
 大大学院に進まれた。小生の知人足達俊英氏（仏
 大専任講師）の後輩のよし。あぶらあげ・ほう
 れんそう・うすぎりのコブが乗ったおうどんは
 うすあじながらたいへんおいしかった。おとし
 さのあまり、残り汁をすべてのみほしたほどだ
 った。

たそがれの夕闇せまる五時四五分、金堂への
 道を二五名の参拝者は静々と歩を進める。途中
 一七六のガランドウが五〜六メートルごとに置
 かれている。なかの灯明はインドを思わせるか
 わらけの中に燃えている。

④

六時から八時まで吉祥過悔の法要が厳修され



金堂までの道に置かれたガランドウ

金堂入口



た。金堂の中は電気を全く用いず、灯明のみである。「吉祥」とは吉祥天のことで、『金光明最勝王経』の説くところにしたがって、吉祥天（ラクシユミー）と多聞天（ヴァイシユナヴァ、毘沙門天）に、国家安穩・万民豊樂・寺門興隆等を祈願する法要である。多聞天は男神であるが、女神である吉祥天が前面に出ているところが興味深い。「過悔」とはみずからの罪業を吉祥天と多聞天に懺悔し、自己の身心を清浄にすることが可能となる。

金堂の本尊は有名な止利作の釈迦三尊像（国宝、六二三年）である。灯明のうすくらがりしかしかとは見えなかつたが、この釈迦三尊像に対する聖徳太子の深い祈りの念がひしひしと伝わってきた（週間朝日百科『日本の国宝』001 奈良／法隆寺1、一九九七年二月二三日発行、参照）。三尊像の前には数十の和餅が供えられ、

向かって左に吉祥天が、右に多聞天が立たれる。練行衆（寺僧）の数は九名。十名が定員であるが、大野可圓長老の体調よろしからずとのことで空席であった。暗がりに懐中電灯を用いて『法隆寺要集』を追うも、時々ついてゆけないこともあった。声明の独特のふしまわしに、一五〇〇年の伝統の重みを感じた。藤谷師は「百済系のみではなく、のちに唐代の儀礼が混ぜられたのではないか」といわれる。

本年は牛年なので例年に比べてとりわけ丁重に穩厳に勤められた。釈迦三尊像の後に置かれた牛玉像の中に仏の徳をシンボライズした牛玉がある。結願作法の終わったのち、導師は礼盤から下りる。高位の寺僧から順番にこの牛玉を拝み、牛玉宝印が授けられる。われわれ一般の参拝者にも牛玉札が授与された。法衆なり。

すべての行を終えた寺僧たちは、金堂を出て聖霊院に向かう。大導師は、修正会吉祥悔過の

無事修了（結願）を聖徳太子の御真前に読経をもつて報告するのである。外は、二時間のあいだに雪ならぬ雨が少しく降り、石だたみにおしめりを与え静謐にして至福、すばらしい法縁にめぐまれることになった。

5

ホテルに帰って気がついたことがひとつある。二時間の金堂外陣での灯明のススをすつて、鼻の穴が黒くくすんでいる。ティッシュペーパーでふきとつたすすに鼻をよせたら、聖徳太子の飛鳥時代のおひがかすかに感じられた。寺僧の方々は八日から十四日までの一週間、目やのどはやらははしまいかと心配になった。

金堂壁画のこともいいそえておこう。外陣からかすかに見えて、写真ではなく、おのが肉眼で見ることができたといういくばくの喜びがあった。よく知られているように、昭和二四（一

九四九）年一月二六日未明失火により壁画が焼損した。今日の壁画は再現されたものである。

アジャンター石窟寺院群の第一窟後廊左部の壁面に絵かれた「麗しの菩薩」とも呼ばれる持蓮華菩薩に匹敵・対比されるのが、法隆寺金堂再現壁画六号壁、阿弥陀浄土左脇侍の観音菩薩像および同右脇侍の勢至菩薩である。

昭和二九年金堂は無事修復落慶した。二度と火災をおこさないという誓願をこめて、翌年から「金堂壁画焼損自肅法要」が一月二六日にとめられている。

会津八一の三首を引用して、この稿を了としたい。（同六六―六七ページ）

いたづきの まくらにさめし ゆめのごと
かべゑのほとけ うすれゆくはや

ひとりきて めぐるみだうのかべのゑの
ほとけのくにも あれにけるかも

おほてらの かべのふるゑに うすれたる
ほとけのまなこ われをみまもる

〔参考文献〕

『法隆寺の四季と行事』（高田良信著 小学館）

『法隆寺の謎と秘話』（同 小学館）

『法隆寺の四季―行事と儀式』（法隆寺）

